熊野の森から

# 怪しの熊野

## 其の六十

## 「旧・田辺市の怪異（其の二）」

和歌山大学
システム工学部
環境システム学科
中島敦司教授

かつて田辺の芳養にあった「さいた橋」での話だが、夜、帰り道を急ぐ若い男が美しい小袖を着た娘が泣いているのに出くわす。若者は娘に声を掛けたが、娘はただ泣くばかり。思い切って娘の顔を提灯（ちょうちん）にかざしてみたところ、娘の顔には目、鼻、口がない。若者は驚き、牛の鼻の茶屋に逃げ込む。店の者に先ほどのことを話すと「その娘はこんな顔でしたかな？」と言って見せた顔は「のっぺら坊」だった。若者は腰を抜かして気絶してしまい、気が付いた時には夜が明けていたという。これは、ラフカディオ・ハーンの「むじな」とほとんど同じ話だ。このように「さいた橋」には昔からカワウソが棲み、夜遅くに街道を通る人々に悪戯（いたずら）をしたのだという。声色が上手く、人の声色を真似ては通る人の名前を呼ぶこともあったという。

畑周りに張ってある網に絡まり、殺処分を待つシカ。近年、野生動物が増加していると言われているが、江戸～明治時代には今よりも生息数が多かった。その後の捕獲利用、駆除で激減し、昭和中期には絶滅寸前までに数を減らしたが、近年になって数が「回復」しつつある。昔も、山村での獣害は多かった。

害獣としての駆除対象にもなっているニホンアナグマ。環境の時代なのだから「害獣イコール抹消」で良いはずがない。自然を尊敬してきた日本人は、殺処分せずとも自然と上手に付き合う方法を世界に先駆けて見つけ出すことができるはずだ。

万呂には河童（カシャンボ）が棲んできたという。南方熊楠は馬小屋に入り込んでは悪さをする万呂のカシャンボの正体はカワウソであろうと考察している。その上で「薩州の農家にては、獺を殺さば祟りをなす。祟ること七代にしてようやく止む」という。大いに恐れてあえて殺す者なし、云々と記している。カワウソは、当時は害獣だったようで、駆除の対象になっていた。また、毛皮が珍重されたこともあって、今では全国的に絶滅したとみられている。その一方で、祟りという恐怖を用いつつも殺生を戒める言い伝えがあったことは、自然に畏怖畏敬の念をもつ日本人らしい話であろう。

そういえば、近年は山間部などでは獣害が多く、さまざまな野生動物が駆除対象として殺処分されている。野生動物の被害を受けている皆さんがお見えになることには心を痛めるが、日本の将来への不安もある。先日、山で出くわしたアナグマの写真をインターネットに載せた。すると「害獣であるアナグマは殺処分あるのみ」とのコメントが相次ぎ、共存の可能性は拒絶された。「不都合な存在は抹消すればよい」という発想は、戦前のファシズム国家の発想と似ている。自然保護の祖である熊楠も記したように、日本人は宗教上の理由もあって殺生を禁忌した民族だが、近年はそのセンスが失われつつあるのかもしれない。

**中島敦司（なかしま・あつし）教授プロフィール**

昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗（妖怪、伝承）。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30～50日は訪問し、研究する。